

# まちづくりにおける質的研究のあり方に関する研究 —計画学と看護学の相似性に着目して

久 隆浩<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 近畿大学教授 総合社会学部環境系専攻 (〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1)

E-mail: hisa@socio.kindai.ac.jp

本研究は、看護学領域の質的研究と比較しつつ、計画学領域の質的研究のあり方について考察する。看護とまちづくり支援には共通的な特徴がある。いずれも当事者を支援する役割を担っており、現場への参与観察による臨床研究である。ここでは失敗は回避すべきものであり、比較実験が行いづらい環境にある。こうした共通点を考えると、看護研究における質的研究のあり方の議論が計画学領域に援用できると考える。看護研究においても、近年、グラウンデッド・セオリーやフォーカス・グループ・インタビューなどが多用され、質的研究に関心が寄せられているが、研究としての科学的妥当性を保証するためには「信憑性」をどのように担保するのが重要であると言われている。こうした看護領域の質的研究の議論を参考に、まちづくり分野における質的研究のあり方を考える。

**Key Words:** *community planning, nursing science, research method, qualitative research, scientific validity*

## 1. はじめに

本論文では、看護学における質的研究のあり方を参照しつつ、計画学における質的研究のあり方を検討する。看護学に着目する理由は、以下の述べるように看護学と計画学に共通点がみられるからである。

質的研究と看護学の親和性について、岡本<sup>1)</sup>は次のように述べている。質的研究は「その概念や評価方法について統一的な考え方が確立されていないが、文献的検討を踏まえて、①研究対象の一つひとつを事例として重視する、②事例をその存在するコンテキストから切り離さない、③事例を事例自身の表現する（あるいはした）テキストによって記述する、④テキストの意味を研究者が研究対象の内面に入り込んで解釈し、理解する、と暫定的に概念規定すると、人間を対象としたヒューマンサービスの領域、とりわけ看護領域の実践活動と親和性の高い研究方法であると言え」る。「すなわち、臨床看護や地域看護の実践の場面においては、①患者や住民のひとり一人を大切に扱い、②その表現する訴えや要望を受け止め、③それらの表現の背景にある文化的あるいは地域社会的コンテキストを理解し、④ケアや指導を実践し、⑤患者や住民の満足度に基づいてそれらの実践を評価する、からである。」この論旨は、まちづくり支援とみごとに重なる。看護もまちづくり支援も、当事者である住民が持つ力を引き出す、いわゆるエンパワーメントを図ることによって、住民が主体的に健康づくりやまちづくりを行えるようにしていく。

第二の共通点は、看護もまちづくり支援もともに現場に入り支援を行うものであり、これを研究対象とするならば臨床研究となる。現場では、個人の健康や生活の質の向上をめざして支援が行われるので、倫理的な観点から介入群と非介入群に分けた対照実験を行うことはできない。こうした共通点が、看護やまちづくり支援の研究で質的研究が多いことにもつながっていると考えられる。

## 2. 質的研究の特徴

改めて、量的研究と比較した質的研究の特徴についてみていこう。質的研究のあり方を分析した論文の嚆矢として、見田<sup>2)</sup>の『「質的」なデータ分析の方法論的な諸問題』がある。

見田は、数量的データと質的データの違いについて、「直感的にふつう言われていることは、前者がともすれば、「たしかだが、おもしろくない」分析に終るのにたいし、後者がともすれば、「おもしろいが、たしかさがない」立論になりがちだ」と述べている。「たしかだが、おもしろくない」という印象はじつは、数量的データのもつ、つぎのような欠点の素朴な表現である。

- (1) 追体験的な了解可能性の稀薄
- (2) 総合的・多次元的な把握の困難さ
- (3) 変化のプロセスや可能性に関する動的な把握の困難さ

「質的」なデータはこれとは逆に、諸次元のダイナミックな関係をそのあるがままの姿で示し、生きいきとした具体性と「了解可能性」を保ちうる。」

「しかし「質的」なデータもまた、いくつかの固有の弱点を持つ」として、その重要な点として、次の 2 点をあげている。「第一に質的データは、(事例そのものが研究の終極的な課題である場合を除けば)「代表性」の保証がないので普遍的な法則を導き出すことが困難であると考えられている」「第二に「質的」データは、分析の手順や着眼点を「標準化」し難いために、不精確な観察や恣意的な推論の入りこむ余地を与える。その結果これらのデータの解釈における信頼性、客観性、精密性は、少なくともある程度まで犠牲にされざるをえない。」

こうした課題をわきまえて質的データを用いるべきであるとした上で、見田は質的データに適合した研究として、つぎのようなものがあるとしている。

- (1) ある社会 (心理) 現象の、内的な構造連関の解明
  - (2) 生成・発展・衰退・消滅における動的な因果連関の追求
  - (3) 実体または機能に関する、類型論の展開
- まちづくりの展開プロセスをダイナミックに記述、分析するまちづくり研究は、まさしく質的研究に適合していると言える。

### 3. 3つの研究法

今田<sup>3)</sup>は、研究法を「万有引力の法則やエントロピーの法則など普遍的に成り立つ理論法則によって現実を認識する《数理演繹法》、実験や大量データから一般化された経験法則によって現実を捉える《統計帰納法》、および個別で 1 回限りの事象から物事の本質を解明する《意味解釈法》」の 3 つに整理している。そして、それぞれが捉えるリアリティを次のように対応させている。「意味解釈法によって構成されるリアリティとは、個別で特殊であるが有意義な事例にひそむ物事の本質であり、解釈によってその存在を認識すべきものである。また、統計帰納法によって構成されるリアリティとは、具体的な大量観察において認識されるものであり、帰納法によって一般化されるべきものである。さらに、数理演繹法によって構成されるリアリティとは、理念型により抽象的な純粋型として認識されるものであり、演繹法によって時空を超えて普遍化されるべきものである。」「現象を個別・一般、具体・抽象、特殊・普遍という二分法で区別していえば、個別で特殊なしかし本質的なリアリティを問題にするのが意味解釈法であり、具体的で一般化可能なリアリティを扱うのが統計帰納法、そして抽象的で普遍化可能なリアリティを扱うのが数理演繹法である。」

こうした整理に位置づければ質的研究は《意味解釈法》ということになる。今田は意味解釈法について、「この方法は、現象学的社会学、エスノメソドロジー、

シンボリック・インタラクショニズムなど意味学派的方法的基盤となっており、参与観察、ドキュメント解析、エスノグラフィー、モノグラフ法、会話分析などがその代表例である」と説明している。また、「「厚みのある記述」と「解釈による存在了解」の 2 つからなる方法」と位置づけている。「厚みのある記述」(thick description)とは、文化人類学者の Geertz が『文化の解釈学』で述べたもので、観察された行為から意味の構造を読み取り、それが成立する社会的基盤を探るものである。Geertz<sup>4)</sup>は、「理論構成の基本的な課題は、抽象的規則性を取り出すことではなく、厚い記述を可能にすることであり、いくつも事例を通じて一般化することではなく、事例の中で一般化することなのである」と述べている。また、「解釈による存在了解」は、事例にひそむ物事の本質を解釈によってあきらかにしていくことである。こうした事例の解釈から、物事の本質を見極め、意味やそれをもたらす社会構造・文化構造を見出すことが意味解釈法、そして質的研究の役割といえる。

### 4. 看護学における質的研究

北島ら<sup>5)</sup>は、臨床看護職による学会誌掲載論文の特徴を分析している。2004 年から 2008 年の 5 年間に発行された 25 の学術雑誌に掲載されていた 1,545 論文のうち、臨床所属の看護職が第一著者である論文 210 編を抽出し、研究法を分類した結果、量的研究 91 編 (46.9%)、質的研究 86 編 (44.3%)、ミックス・メソッド 10 編 (5.2%) であったとしている。

山本<sup>6)</sup>は、看護学のための「知」を、①患者の経験を理解するための知、②個々の看護介入に関する知、③患者とのケアリング関係に関する知、④看護を展開するための知、に分類し、次のように説明している。「まず①「患者の経験を理解するための知」は、患者個人や家族の主観的な経験世界を主に探求する「知」であり、私は「一人称の知」と呼ぶこともある。看護師は患者自身が望む生活を実現できるよう支援する。このため、看護師が何をどのように支援すればよいかを決めるのは、患者がこの世界にどのように在り、何をどう見てどう感じ何を願うのかという患者の「一人称の知」である。このため患者の「一人称の知」は看護を实践するうえで不可欠である。これには、客観的な測定可能性を重視するタイプの研究はその形態上なじまず、もっぱら質的研究方法に頼る。②の「個々の看護介入に関する知」には、従来の科学に基づく研究方法が威力を発揮する。どのような褥瘡にどのような手当てをすることが最も効果的に治癒を促進するのか、誤嚥しないで食事をするためにどのような体位が最も適切か、などといった知識は、従来の科学の方法によって最も効果的に生み出されるだろう。

そのため、個々の看護介入を充実し改善してゆくためには、論理実証主義を基盤とする従来型の科学によってもたらされる知が不可欠だと思う。」

「さて、看護実践を行う上で、患者・家族との共感性を伴う人間的な関係の構築と維持・強化は基本的な前提であり、これがなくてはそもそも個々の看護介入が提供できない事態も生じうる。共感性を伴う人間的な関係を可能にするには、他の対人援助職と共通する「③患者とのケアリング関係に関する知」が求められる。ここには質的研究が主になじむように思われた。最後に、「知」の構築を考えることが最も困難な領域がある。それは、一つ一つの看護介入をどのように組み立てて展開すれば望ましい方向性に患者と家族を導くことが出来るかという、戦国武将が戦術を組み立てるような知のあり方で、これを「④看護を展開するための知」とした。これは患者・家族および看護師の多様な背景を文脈として実践される知であり、数量化をすることは困難で、質的研究の領域だろう。このような知は、患者・家族を「一人称の知」を用いて理解し、その理解に基づいて適切な支援を判断し計画実施するという一連のプロセスであり、看護師の側の「一人称の知」とも考えられる。すなわち、④看護を展開するための知は、患者・家族の個別の文脈とともに看護師自身の背景や特性が絡む、極めて個別性の高い知となるだろう。」

山本の言う①患者の経験を理解するための知、③患者とのケアリング関係に関する知、④看護を展開するための知、は「まちづくり支援の知」と重なるものである。すなわち、①は生活者の暮らしの状況やありかたを知る知、③は支援を行う専門家と住民の関係を考える知、そして、④はいかにしてまちづくりを進めていくかを考える知、である。山本の言うように、これらは質的研究に頼ることになる。また、山本の言う「一人称の知」は、私のこととして、言い換えれば主観的に考えるという意味であるが、これも客観性を求める学術研究の俎上にいかに載せるかを検討すべき課題である。

## 5. 質的研究の評価基準

続いて、質的研究の妥当性をどのように評価していけばいいかについて見ていきたいと思う。岡村<sup>1)</sup>は質的研究の評価基準について、次のようにまとめている。「看護の日常的な実践は、本論で提案した確実性、信憑性、転用可能性、現実との関連性という四つの評価基準を満足するならば、質的研究として展開できる領域であると考えられる。」この4つの評価基準について、岡本の記述に沿ってもう少し詳細に見ていこう。

まずは、「確実性」について。これは、量的研究の再現性に代わるものと言える。「Pope C と Mays N<sup>9)</sup>も質的

研究の対象となった状況の再現が困難であったり、その状況が社会変動の影響を受けている場合には再現性は無意味であるとしている。さらに、研究対象となった現象の測定や観察結果が時間的経過のなかで安定するという「通時的信頼性」は、質的研究の対象の多くが時間の経過とともに変化するという理由によって排除し、同一時点で異なる方法によるデータ収集を行なった場合にその結果が恒常的である、あるいは一貫性があるという「共時的信頼性」を提案している。

共時的信頼性を高めるためには①研究対象の表現したテキストと研究者の解釈が識別できるようにデータの成立過程を明確にすること、②データ収集やテキスト解釈の方法を明示すること、が要請され、このことによってテキストと研究手続きの「確実性」が検証される。テキスト解釈の再現性を検証する実験的な試みも行なわれているが、質的研究が研究者個人の解釈と理解を前提とする限り、上記①②の条件が満たされることによって、読者がテキスト解釈を体験でき、研究者が類似したコンテキストの事例を追試できるならば、質的研究として十分な評価は与えられると考えられる。」

つぎに「信憑性」について。これは量的研究の内的妥当性に代わるものである。「量的研究で用いられる内的妥当性（測定あるいは観察された結果がコントロールされない交絡変数の影響を受けず、独立変数によってもたらされたと推定できる程度）の概念は、研究対象からそのコンテキストを切り離さない質的研究においては、コンテキストの影響を考慮したテキストの解釈がどれだけ信用できるかという「信憑性」に書き換えることができる。信憑性を高める一つの方向性は、テキスト解釈の信憑性を高めるためのトライアングレーション、分析的帰納、ピア・ディブリーフィングなどである。」

トライアングレーション (triangulation) は三角測量のことだが、質的研究の場合、複数の方法で得た結果を参照し、結論の信憑性を高めていくことである。「解釈の信憑性を高めるためのトライアングレーションには、「理論のトライアングレーション」があり、これは様々な理論的立場を並行して用いることによって様々な視点や仮説を考慮に入れたデータへのアプローチ、テキストの解釈を検討する方法である。」また、「テキストそのものの信憑性を高めるためのトライアングレーションには、「データのトライアングレーション」「調査者のトライアングレーション」「方法のトライアングレーション」があり、データのトライアングレーションはデータ収集を異なる時点や場所で行なったり、様々な人から収集する方法、調査者のトライアングレーションは研究者の個性から生じるデータの歪みを避けるために複数の観察者あるいは面接者を調査に参加させる方法である。方法のトライアングレーションには方法内トライアン

ギューレーションと方法間トライアングレーションがあり、前者は同一方法内で違う視点からデータ収集を行なう方法（例えば、同一質問紙において同じ質問項目を複数の異なるワーディングで実施する）、後者は複数の異なる方法によるデータ収集（例えば、同じ質問項目を質問紙法と半構造化面接法で調査する）である。」

「分析的帰納は、データからテキストを解釈する作業仮説を立て、この仮説にそれぞれの事例やデータがあてはまるかを検討し、仮説に否定的な事例があれば作業仮説を修正する、というプロセスを繰り返すことによって、テキスト解釈の信憑性を高める方法であり、飛び離れた事例の検討と呼ばれることもある。ピア・ディブリーフィングは、研究に直接関与していない人と当該の研究について定期的にミーティングをもつことによって、研究上の盲点を発見したり、テキスト解釈の問題点を指摘してもらう方法である。

3 つ目に「転用可能性」について。これは、量的研究の外的妥当性に代わるものである。「量的研究で用いられる外的妥当性（測定あるいは観察された結果が他の対象や状況に一般化できる程度）は、各サンプルのコンテキスト要因を無作為抽出によって捨象し一般化する概念であるので、事例からコンテキストを切り離さない点に意味のある質的研究では、あるコンテキストにおいて得られた解釈や理解が他のコンテキストにどの程度転用可能であるかという「転用可能性」に置き換えざるを得ないと考えられる。

転用可能性を高める方法としてはグラウンデッド・セオリー法の継続的比較と Weber M の系譜を引く理念型形成があり、前者は研究者がテキストを解釈してすでにコード化・分類した結果を常に比較参照し、コード・分類の修正を行ないながらコンテキストの異なる他の事例のコード化・分類を継続することによって他のコンテキストへの転用可能性を検証する方法である。理念型形成は Weber M の理念型の考え方に基づいており、①個々の事例を比較対照して複数の事例をまとめるタイプを構成し、②このタイプを代表する純粋な事例（プロセス上の理念型）を見つけ出し、③個々の事例をこのプロセス上の理念型と対比して系統的に理解し、④タイプの再構成を行ない、個別事例のコンテキストを超えた構造（理念型）の理解を得る方法である。」

最後に「現実との関連性」について。「医療技術評価、看護研究の領域では「現実との関連性」（現場で実務に従事している人たちが直面している問題を解決するのにそ

の研究結果が関連しているか）が重要であるとされている。それを問うのが「現実との関連性」であり、計画学でいう有用性の観点である。

## 6. まとめ

山本<sup>6)</sup>も「対象選択の妥当性に関して明示されているものは22編(41.5%)であり、実際には所属病棟等の便宜的サンプリングが多いものと推察されるが明示はされていないため、今後、選択した対象から適切なデータが得られたのかを論じていくことで、さらに読者の理解を助けると考えられ」としている。また、共同研究者らによるチェックがされているものは17編(32.0%)、スーパーバイズ・外部監査者のチェックを受けているものは28編(52.8%)であったが、この手順を踏むことにより質的研究の真実性が確保されていくと考える」と述べている。事例を文脈から切り取らず総合的に分析できる質的研究であるが、それゆえに解釈がむずかしく主観的になりやすい。それを克服するための手法についてはこれからも開発を進めていかなければならない。また、質的研究の評価基準は、量的研究とは異なるものであることを共有し、論文作成、評価を行う必要がある。

## 参考文献

- 1) 岡村純：質的研究の看護学領域への展開 社会調査方法論の視点から、沖縄県立看護大学紀要 5号、pp.3-15、2004
- 2) 見田宗介：「質的」なデータ分析の方法論的な諸問題、社会学評論、15(4)、pp.79-91、1965
- 3) 今田高俊：リアリティと格闘する、社会学研究法 リアリティの捉え方、有斐閣、2000
- 4) Geertz, Clifford: Thick description: Toward an interpretive theory of culture、in "The Interpretation of Culture"、1973（日本語訳：厚い記述—文化の解釈学的理論をめざして、文化の解釈学Ⅰ、岩波書店、1987）
- 5) 北島洋子ほか：学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要、19、pp.1-15、2012
- 6) 山本則子：看護実践の知と質的研究、質的心理学フォーラム(7)、pp.74-82、2015
- 7) Pope C, Mays N, Qualitative Research in Health Care (2nd)、1999。（日本語訳：質的研究実践ガイド—保健・医療サービス向上のために、医学書院、2000）

## STUDY ON QUALITATIVE RESEARCH ON COMMUNITY PLANNING -FOCUSING ON SIMILARITY BETWEEN PLANNING AND NURSING

Takahiro HISA